

2002 年 8 月 4 日

神の像を拝まない

～偶像礼拝の問題点～

[聖書]出エジプト記20章4～6節

20:4 あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。 20:5 あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、 20:6 わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。

◆出エジプト記32章1～6節 金の子牛

32:1 モーセが山からなかなか下りて来ないのを見て、民がアロンのもとに集まって来て、「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです」と言うと、 32:2 アロンは彼らに言った。「あなたたちの妻、息子、娘らが着けている金の耳輪をはずし、わたしのところに持って来なさい。」 32:3 民は全員、着けていた金の耳輪をはずし、アロンのところに持って来た。 32:4 彼はそれを受け取ると、のみで型を作り、若い雄牛の鑄像を造った。すると彼らは、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と言った。 32:5 アロンはこれを見て、その前に祭壇を築き、「明日、主の祭りをを行う」と宣言した。 32:6 彼らは次の朝早く起き、焼き尽くす献げ物をささげ、和解の献げ物を供えた。民は座って飲み食いし、立っては戯れた。

[序]仏教とキリスト教

クリスチャンになったら、仏壇は捨てなければならないのでしょうか。仏壇を守り御先祖さまの供養をきちんと果たしていくことは、家を継いだ者の大切な責任です。一方十戒では「いかなる像も造ってはならない。それにひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない」とあります。だから日本人は軽々しくクリスチャンにはなれない、と思う人が多いようです。

私の母は三人姉妹の長女でしたが加藤の家に嫁ぎましたので、父の弟が養子となって母の妹と結婚して、母の実家を継ぎました。ところがこの叔父叔母夫婦には子どもが生まれませんでしたので、相談の結果、本間の家は古くから続いた家でしたが叔父叔母の代で終わりにすることにしました。そこで母と叔母は菩提寺に行き、永代供養を願い出て本間の家の墓も仏壇もみなお寺に引き受けてもらいました。そして叔父叔母も、私が牧師をしていた札幌の教会で葬式をし、お骨は教会の墓地に納められました。

仏壇は、引き受けて供養をしてくれる親族がいる場合はその方にお願ひし、いない場合はお寺にお願ひすればちゃんと引き受けてくれますので、粗末にしない方法はいろいろあるものです。

二年前の暮に札幌の K さんが84才で亡くなりました。その直前のクリスマス・イブの礼拝では聖

歌隊の一員として奉仕をしておられます。偉いですね。婦人会の会長や教会の役員を長く務めて札幌教会を支えてくださった方です。彼女のご主人が亡くなった時に、大学生と中学生の娘さんが二人とも葬式に参列しないので、親戚中から親不孝だと非難され、Kさん板ばさみになって二重の悲しみを味わいました。娘さんたちは通っていた教会の宣教師から、仏教の葬式に出るのは偶像礼拝することになると教えられていたからだそうです。

彼女も最初のうちは、キリスト教はなんと非常識な宗教だろうかと思いました。しかし日が経つうちに両親のお世話をしながら娘たちの教育を仕上げていくに当たって、心の支えの必要を痛感するようになりました。そして頑として妥協をしなかった娘たちの強さに惹かれるようになり、自分も信仰を持たなければ、しかし娘たちの教会は余りに堅すぎると思って、近所に住む牧師の私の許に相談に来られたのでした。そして私の教会の礼拝に出席するようになり、54才の時にバプテスマを受けてクリスチャンになりました。

先日金沢に住む友人から手紙が来ました。彼が伝道している町は昔から仏教の盛んな地方で、家督相続に際しては「寺を守りキリシタンにはならない」という文書に署名し、部落の代表が保証して役人に提出してきた伝統がいまでも生きているそうです。今日はこのような伝統の中で育ってきた者として、十戒の第二、偶像礼拝についての戒めを学びます。

[1]人間と全く質を異にする神

神さまは昔イスラエルの民をエジプトの奴隷の境遇から救い出して、自由な民にしてくださいました。そして神の民として生きていくために十戒をお与えになりました。これはイスラエルの民に対してばかりではありません。今の時代に生きる私にとりましても、神さまはさまざまの束縛から私を解放し、最良の人生を送る喜びを与えて下さっています。神さまは真実をこめて私と一体になろうとしておられます。ですから私も神さまと真っ直ぐに向き合って、誠実に応答して生きていこうと願っています。

さて十戒の第二は「あなたはいかなる像も造ってはならない」です。ひれ伏して拝もうとする目的で、天地万象どんな物の形も私たちの手で造ってはならない。言い換えれば、神さまを像に造って拝んではならないという命令です。何故でしょうか。

先ず第一に、神さまを像に表わすことが出来ないからです。パウロは、哲学の都ギリシャのアテネで、哲学者たちにこう語りました。「世界とその中の万物を造られた神が、(人の)手で造った神殿などにはお住みになりません。また何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです」(使徒17:24~25)。そうです。世界をお造りになった神さまを、このちっぽけな私の手の中で造れるはずはありません。

シンガポールのチャイニーズ・ニューイヤーは古い暦での正月ですが、日本も昔は古い暦を使っていました。それによると10月は神無月(かんなつき)といって、神さまがいない月と呼ばれていまし

た。全国の神々が出雲の国の出雲大社に集まるからです。そこで出雲大社の拝殿の横には、神の宿という長屋が建っています。出雲大社が神々の滞在する宿を用意したのでした。神がまるで全国市町村の長のように考えられています。

江戸時代の国学者本居宣長は、日本最初の歴史書「古事記」の注釈書「古事記伝」(古典・古代文化研究の最高峰と言われています)の著者として有名ですが、彼は日本人は人でも生き物や自然の物でも、「尋常ただならざるものをかみ(上)と呼ぶ」と定義しています。特別に勝れているものは何でも「かみ」にしてしまうというのです。出雲大社に祀られている大国主命にしても、出雲地方の国造りをした豪族です。ですから日本では神が「八百万(やおよろず)の神々」と言われて、限りなく数が多いと思われてきました。これはいろいろなものに霊が宿っていると考える精霊信仰からくるものでしょう。

仏壇は死んだ人の法名を記した位牌をかざり供養をする厨子です。毎日水とご飯を上げ、お経を読むのも、亡くなった家族を大事におもい冥福を祈るためにするのです。ところが日本人は何でも神にしてしまいますから、死んだ人もいつの間にか神・仏になって礼拝の対象に混同されていきます。法名が書かれてあるだけの位牌が霊の宿った特別なものになってしまうのです。

これに対して聖書の信仰は、神さまは天地万物を造り、私たちに命と霊をお与えになった方だから、造られた一切のものは全く質を異にするお方で、どんな被造物によっても現すことは出来ないと主張します。だから人が造った像を神だとして拝むことは、神ではない物を神として拝むことになるのです。

三浦綾子の旧約聖書入門にユダヤ教徒・キリスト教徒・イスラム教徒から「信仰の父」として尊敬されているアブラハムの伝説が紹介されています。彼の父テラは偶像を造って売っていました。アブラハムはそれがとても嫌でした。父の留守に客が偶像を買いに来ました。「お客さんはお幾つになりますか」。客が60だと答えますと彼は「60才になられる貴方が、職人が6時間もかからずに造った像を拝むのですか」と言ったので、客は不機嫌になり買わずに帰ってしまいました。

またある時テラが外から帰ってくると、幾つもの像がこわれて倒れています。「一体どうしたんだ」。「お供えの食べ物をこの神々が奪い合って喧嘩になり、ご覧のようにこわれてしまいました」。「馬鹿をいえ。命のない像が喧嘩をするわけがないではないか」。「では命のない偶像に、命のある人間の頭をさげさせ、拝ませてよいのでしょうか」と父を諷めたそうです。

[2]言葉をもって語りかける神

なぜ神さまを手で造った像に表わして拜んではならないのか。第二の理由は、像が言葉を語らないからです。聖書が教える真の神さまは私たちに言葉をもって語りかけるお方です。ところが像はたとえどんなに芸術的に優れた作品であろうとも、ものを言いません。この点で神さまを決定的に表わしていないからです。

預言者エレミヤがこう語っています。「もろもろの民が恐れるものはむなしいもの、森から切り出された木片、木工がのみを振るって造ったもの。金銀で飾られ、留め金をもって固定され、身動きもしない。きゅうり畑のかかしのようで、口も利けず、歩けないので、運ばれていく。そのようなものを恐れるな。彼らは災いをくだすことも幸いをもたらすこともできない」(エレミヤ10:3~5)。「畑のかかし」とは痛烈な皮肉ですね。鳥たちを初めは脅かせても、すぐに正体を見破られて馬鹿にされてしまいます。

では仏像・仏画はどうなのでしょう。5月にも少しご紹介した丸山寿美さんは今年66才、仏さまの画を一心に画き続けておられます。三年前に彼女の個展で観世音菩薩像の大作とお地蔵さんと親しまれている地蔵菩薩の画とこけし人形のような陶器の像を観ました。静かな悟りの境地をひたむきに求めて表現しようとしている作品の一つ一つが、実におだやかな優しさを伝えていました。

釈迦は「人生は苦である」と言われました。法華経に「常に悲感を抱いて、心ついに醒悟(せいご)す」とあるそうです。人生に悲しみを宿していない人は一人もいません。しかしその苦しみと悲しみを大切に抱いて生きているうちに、いつか心が目をさまして、悟りの境地へと導いてくれる。丸山さんはその目醒めをきわめることに、一途にこだわり続けているのです。

丸山さんは法句経の次の言葉をよりどころにしています。「己れによるべは、己れを措(お)きて他になし。よくととのえし己れこそ、まこと得難きよるべなり」。自分の頼りになるものは自分しかいない。だからよくととのえられた自分になるように、ひたすら精進していこうというのでしょう。

丸山さんは言います。「悩みもあり 哀しみもあり 幸せも 喜びも数々あれど 仏は何時も私のまわりを ただ静々と通りゆき 何をか語らん 何をか告げん 知りたくて 悟りたくて ただ一心で またも 仏の後を追う」。またこう言います。「今日のこの一刻を 大切に生きよ 確かに生きよと 私の中の私が ささやいています」。これは自己との対話の世界ですね。

ですから仏像や仏画と対座し、観想しながら自分をととのえていくことに精進する人にとっては、仏像・仏画は礼拝の対象ではありません。あるお坊さんが自分の守っている本堂の見事な仏像を「あんなもの、あってもなくてもかまわない」と言ったそうですが、本当にそうだと思います。本当の仏教者は、偶像礼拝とは無縁の世界に生きているのでしょう。

ここにいたって聖書によって養われる信仰と仏教者の信仰が、全く質を異にしていることが分かってきます。仏教徒は仏が徹底して沈黙者なので、自己との対話に精進していきます。やはり無の世界なのでしょう。これに対して聖書の神は言葉をもって語りかけ、行動を起こされる人格的実在者です。言葉には神さまの命が込められています。私たちは神さまの言葉を真剣に聞き応答することによって、神さまの命をいただいていくのです。

丹頂鶴の卵は器械で温められても、最後の10日間言葉かけをされないと雛が殻を破って生まれられません。言葉がかけられることによって内にある命がひきだされて、生きるものとなります。まして私たち人間は、言葉をかけられていくことによって人格が形成され、人間になっていくのです。ですから人間を創造された神さまが、言葉をもって私たちに絶えず語りかけ、私たちの人格を養い育てていこうとされることは当然ではないでしょうか。

仏教徒は沈黙する仏の前で自己との対話に精進し、ととのえられた自己、優れた人格を確立していくといわれます。私はそのような自分との対話に精進する方に敬意を抱きます。でも神さまとの対話と自分との対話を比べる時、私にとっては真の神さまとの対話の方が、人格を育てていくにあたってはるかに優れていると思えるのです。

何故ならば、私のような者が一人で語り始めると、どうしても手前勝手な自我のこだわりから抜け出ることが困難だからです。神さまああしてください、こうしてくださいという祈りは、神さまを召使にして自分の欲を果たそうとする自己中心なご利益信仰に他なりません。神さまから正しい命の言葉を聞き、自我のこだわりから引き離されて、真実に応答していこうとするところで、私の人間としての在るべき人格が創られていくのではないのでしょうか。私にとっては、もの言わぬ神をつくって拝むことは、自分を卑しくしていく道だと思うのです。

[3] 享樂と結びつく偶像

第三の理由として、偶像礼拝が道徳的廢類と結びつく人間の現実があげられます。出エジプト記32章をご覧ください。十戒を授けられた時、モーセは40日間シナイ山に留まり、下りて来ませんでした。すると人々は動揺し始めて「我々を導く神々を造ってくれ」とアロンに要求しました。そこでアロンは彼らの金の耳輪を集めて溶かして金箔にし、木で造った雄牛の像に金箔を貼って民に与えました。人々はその金の若い雄牛の像に献げ物を供え、座って飲み食いし、立って戯れました。

彼らはモーセという優れた指導者を通して神の言葉を聞き、その言葉に従うことによってエジプトから脱出し、自由な民になれましたが、まだアラビアの荒野の真っ只中にいます。目的地カナンまでの旅が残っています。どのようにして神さまの力強い導きに従えばよいのでしょうか。彼らは自分たちの目で神さまを見て安心したかったのでしょうか。

彼らは金の子牛の像ができた時、「これこそエジプトから導いた我々の神だ」と言いました。別の神の像を造った積もりはなかったのです。そしてこの金の雄牛の像を先頭にして、これまで通り神さまの後を進んでいこうとしたのでした。

でもその神がどうして金の雄牛だったのか。多分彼らがエジプトで暮らしていた時に、エジプト人たちが雄牛を神の像として拝んでいたのを見ていたからでしょう。確かに雄牛は家畜の中で一番力強く、頑健で、繁殖力があります。しかしだからといって、雄牛が神さまの絶大な力と強さをよく現すものものなのではないでしょうか。どうみても世界を造り正義をもって支配しておられる神さまを現してはいま

せん。どうして雄牛が神さまなのでしょうか。私でしたらとても満足できません。拝む気がしません。

ところがイスラエルの人々は喜んで献げ物を供え、飲み食いし、戯れたのでした。6 節を Today's English Version は "The people sat down to a feast, which turned into an orgy of drinking and sex." と訳しています。宴会が盛り上がり酒をがぶ飲みし、男女の性欲が吹き出て大変な乱痴気騒ぎになったという記述です。神さまが正しく礼拝されなかったら、お祭りが性の乱れと簡単に結びついてしまったのです。ここに偶像礼拝の問題点があります。

新約聖書ではコリントの教会に宛てた手紙でパウロが偶像礼拝を厳しく戒めています。何故でしょうか。ギリシャのコリントの町には女神アフロディアの大神殿が建ち、遊女 1000 人が集まっていたと言われます。享乐的で退廃した町でした。ですからパウロは「みだらな者、偶像を礼拝する者、姦通する者、男娼、男色をする者——は、決して神の国を受け継ぐことができません」(1コリント6:9)と戒めています。正しくない者の一覧表で偶像礼拝者が性の乱れの中に分類されています。

どうして神殿と遊女とが結びつくのでしょうか。農作物の豊かな実りが豊かな生殖に通じるからでしょう。商売繁盛による豊かさが人を快楽に走らせるからでしょう。日本でも豊年満作の祭りには、宴会と踊りと奔放な戯れが認められました。大きな神社やお寺のある町には、遊郭が建ち並び、参詣を終えた男たちが精進明と称して快楽にふけりました。

正しい言葉をもって語りかけてこない神、もの言わぬ神を造って拝む信心は、自分の願望を神にあれこれ語って自分の思いを遂げようとする勝手さに陥ります。欲望に引き回されて、道徳的にくずれていく危険にさらされるのです。日本でも神信心と享楽とがしっかり結びついてきました。偶像を造って拝もうとする私たちの心の底には、享楽を求める密かな魂胆が潜んでいるとも言えましょう。

[結]idea を idol としない

十戒の第二は、神さまを像に造って拝んではならないという戒めです。その理由は第一に、神さまを像に表わすことが出来ないからです。ですから自分では神さまを拝んでいる積もりでも、神ではないものを拝んでいることになります。

第二に、造られた像はものを言わないからです。私たち人間にとって言葉は欠かすことの出来ない大切なものです。神さまはその言葉をもって語りかけ、私たちの人格を創り上げて下さるお方です。神さまの言葉を真剣に聞き応答する対話こそが、私たちの礼拝です。

第三に、偶像礼拝が不道徳と結びついている私たちの現実があります。私たちはさまざま欲望を備えています。その欲望をどのように清めて人格を高めていくかが私たちの課題ではないでしょうか。

英語では偶像を idol といいます。idea (考え方・信念・観念) と通じる言葉です。私たちの考えや

信念が神ならざる神・偶像になるという現実からきているのでしょう。idea が idol になって私たちを引き回させないために、私たちはいつも神さまと対話する正しい礼拝を大切にしていきましょう。神の言葉を聞いて生きていくことが私たちの人生の基本です。 完